
アバンチュールの名の下に

ヨイヤサ・リングマスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アバンチュールの名の下に

【Nコード】

N0008Z

【作者名】

ヨイヤサ・リングマスター

【あらすじ】

「ワシ、異世界に行くわ」そう言つてノリで世界を渡ったとある国の王様キルカツ・ウィルムヘッド。
渡った世界で王様は突然愛に目覚める……。

そうして渡った世界でゲットした恋人ユティ・パミュロと共にさらに別の世界に！

二人で転移した世界は人間のいない妖怪の世界。

最初の異世界転移という設定が全く関係ないギャグギャグしい展

開の連続ながら、キルカツとユティのラブラブカップルはどこに行こうとも互いを愛し合うアバンチュールを求めていくのであった。二人だけの人間として。

ヨイヤサ作品？9 テーマは『キャラの掛け合いの練習&アバンチュール』

第1話：王様、異世界へ行く（前書き）

始めましての方ははじめまして。
久しぶりの方はお久しぶりです。

またも始まるヨイヤサ劇場、今度は前々から書くことと想っていた
恋愛作品です。

まあ、なにはともあれ良ければ読んでみてください

第1話：王様、異世界へ行く

「なあ大臣」

「何です陛下？」

「ワシ、勇者が嫌いじゃ」

そこは見る者を魅了するほど美しい、素人目に見ても高級と分かる調度品に溢れ。

壁に掛かる絵画や床に敷かれた絨毯、どれをとってもこの国の平民の年収以上の価値がある。

そんな部屋の中でも特に金がかかっている装飾の凝った椅子に座り、同じく金のかかった机に山のように乗せられた書類に埋もれているのはこのリングルド王国の王様、キルカツツ・ウィルムヘッドだった。

「だつてさ、うちの国の勇者って凄い口が悪いじゃん。腕は立つけど反りが合わないというかね」

「本人にそんな事を言つては駄目ですよ陛下。」

彼はこの国を長年悩まし続けてきた魔王の隠れ家を殲滅してくれたんですから。

あと今日が勇者さんの功績を表彰をする日だということもお忘れなく」

大臣も王様であるキルカツツよりも勇者を優先して考えてしまう。

そしてそれがキルカツツには面白くない。

「はあ……、最近城下町で有名な異世界からの召喚魔法で勇者が異世界に行ってくれんかのう」

「陛下、魔王は居なくなりましたが魔物はまだいるんですから勇者さんに居なくなられては困ります。

むしろ陛下が召喚されて国を出て行ってほしいくらいですよ」

「はっはっはっ

大臣も冗談がうまいな………「冗談だよね？」

本気とも冗談ともとれない口調の大臣に思わず確認を取ろうとするが答えない大臣。

歴史あるこのリングルド王国のキルカツツ王は意外と人望はなかつたりする。

「はあ、もういいや。」

それじゃワシ寝るから。

勇者の表彰式になったら起こして」

「あ、陛下。まだ今日中に目を通してもらわないといけない書類が山ほどあるんですから寝ないでください。

陛下の体力を数値化すると、大体100。

書類の量を数値化すると1万。

安んでいる暇はないです」

「……………それじゃワシ死んじやうんじやない？」

「いえ、死人ですら生き返るといふ秘薬がありますから体力ゲージがマイナス9千9百になったら回復させてあげます」

「それって不眠不休で仕事終わるまで寝るなっことでしょ？」

ねえ、そうなんでしょ？」

まあ、この国は概ねこんな感じである。

……………
……………

.....
ひとり執務室で書類の山と格闘をする王様。

「オラオラオラー！」

「どうだ書類共！ このワシの超すごい関節技はああー！？」

文字通り書類の山と格闘。

つまり目を通し終わった書類を折り曲げて、紙飛行機を作っていた。

「はっはー」

バキバキに体中を折りたたまれてはもう書類としての職務を果たせないだろ『紙』めえ？

もうこうなつては裏面印刷しようにもコピー機詰まらせてグチャグチャの酷い有様になるぞ。

ワシを苦しめるからこんなことになるのだー」

と言って、作った紙飛行機を次から次へと窓から外に飛ばす王様。

ボタン

「陛下！ なぜ書類を紙飛行機にして外に飛ばしているのですか！？」

「えー、だってもう読み終わったものだし。用事が済んだ書類ならそのまま捨てるよりいいじゃん。もったいない精神ってやつじゃよ」

「この国の重要機密の書類まで飛ばして勿体ない精神もあったものじゃないでしょ!？」

「いつまで精神的に子どもものつもりなんですか?」

「ほら、爺口調の『男の娘』とか人気あるじゃん?

「ワシそついうキャラを目標そつと思つてのう」

「あんだこの国の王様を何年やってんだよ!？」

「王様は今年で50歳。即位20周年である。」

「それよりも勇者の表彰か?

「それなら仕方がないから書類仕事を放り出していこうとするかのう」

口笛を吹きながら自然に見えるわざとらしい動きによって、残った書類の山を事故を装って窓から投げ捨てる王様。

「だーっ、あんた本当に王様かあー!?
誰が落ちていった書類を回収すると思ってるんだよ!?」

「ほら、秘密を持たないオープンな国つてのも親しみが持てるじゃ
ろ？」

「国の秘密だなんて隠しちゃ駄目じゃよ」

「あんたなんて異世界へ勇者として召喚されてしまえばいいんだー
!?!?!」

大臣の一言。

「……うむ、それも悪くないかもしれんな。
異世界か……そうじゃ、ワシは異世界の勇者になってしまおう!」

「はあ?」

きよとんとする大臣を放置し、

「前回の大臣の言葉を考えてみたのじゃが、ワシ、この国に必要な
いなら異世界に行くのも悪くないと思ってるのう。
では!」

『この世に存在するありとあらゆる神よ精霊よ。

このワシ、リングルド王国国王キルカツ・ウィルムヘッドの魂を魔王だなんだで困っている異世界に召喚させたまえ』……」

突然呪文を唱えはじめ、それと同時に足元に魔法陣が描かれ、怪しげな煙が室内を満たす。

「それじゃ大臣。ワシちよつと異世界に言ってくるからあとのことは任せたぞい」

「ちよつ、陛下!？」

「あんた魔法使えたのかよ!？」

「実はワシは魔法の天才でう。

若い頃に修行をしなかつた末に、天才魔法使いとして世界の神様から『あらゆる魔法を使う能力』を認められたのじゃ。

ワシが頼めば無条件で神様や精霊たちが魔法の行使に力を貸してくれるのじゃ」

そして稲光と共に部屋に満ちた煙が消える頃には王様の姿は部屋からも、この世界のどこからも消えていなくなっていた。

さあ、物語はようやくスタート。

天才魔法使いにして王様のキルカツ・ウィルムヘッドの冒険が

今始まる！

第1話：王様、異世界へ行く（後書き）

ちなみにこの作品は話の進みはかなり遅いです。

ギャグですし、キャラの掛け合いを第一に書いていきますのでセリフと間の練習でもありますので。

そして毎度のことながら投稿初日は二話更新なので二話同時更新です。

第2話：ラブ突然（前書き）

更新ペースはこれまでよりは落とすかも知れませんが。

最終話をどうするかは決まってきましたが過程をどれくらい伸ばすかは思案中ですし。

というかまたもや一日に連載開始とか、私はなぜ一日からの連載開始がカッコイイと思うのでしょうか？

その答えは簡単、「理由はない」。何故なら、カッコいいからだ！

第2話：ラブ突然

「姫様、やはり今回の儀式もどうせ失敗するのではないですか？」

「うるさい馬鹿！」

この完璧超絶美人で文句のつけようのない美の女神である私が失敗するなどあるはずがないわ！」

「いえ、現にこれまで召喚した異世界の勇者というのは全て平民だったでしょう？」

「それも何の特殊能力もないものばかり」

「私は失敗なんて一度もしていない！」

「勇者が来ないという実験結果を出しただけよ」

「いえ、世間ではそれを失敗と呼ぶのですが「死ね！！！」グフツ……」

黄金色に塗られた悪趣味な部屋。

その真ん中に立つのは部屋の壁よりもずっと美しく濃い金色の髪を腰に届くほどに伸ばした絶世の美少女。

傍で控えていた男は服装こそはかなり上等の物を着ていたようだ

が、それもこの姫と呼ばれていた少女の理不尽なる暴力のためか、少しばかりくたびれた印象を受ける。

女性の目の前に浮かぶ魔法陣には今なお、魔力を注がれ異世界の勇者を招く儀式は順調に進んではいるのだが……。

「あー、まったく何で異世界の『勇者』が来ないのよ!？」

どこぞの小説では平民を召喚しても特殊なルーンが刻まれることで大活躍する平民もいるつてのに、私が召喚する平民は馬鹿ばっかなんだから!」

これまでに三度ほど失敗、もとい成功しなかったという結果を得ることになったこの少女の名はユティ・パミュロ。

この世界、つまりユティの世界における王国フニャララ王国の女王様である。

この国は現在『魔王』を名乗るちよつと痛い人物が世界を支配しようとする人間も魔族も関係なく配下にしてこの国を攻め滅ぼそうとしているために異世界の勇者が必要なのだ……が。

「まったく、召喚魔法は呼ぶだけでもけっこう疲れるつてのに送り返すのにも魔力使っちゃうのよ。

いい加減今度こそ成功させて残りの血なまぐさい危険な仕事は全部勇者に任せるとお気楽で平穏な生活を送らないと……」

魔法陣に魔力が溜まったことで呪文詠唱を始める。

「『リーユミロ・パ・イテン・イエユ』」

この超ぜちゅ美人ユティパミュロが命じる！

世界を司るなんやかや、異世界の勇者をさつさとこっちに送れえええー！！！！」

「……………噛みましたね」

「噛んでない！」

まあ、セリフを噛んだのはスルーするでしょう。

とりあえずユティもいい加減飽きてきていたのだろう。

多少大雑把な呪文を詠唱し終わると稲光が発生し、その光が弱まると煙を散らしながら一人の男が魔法陣の上に立っていた。

「……………ワシが必要か？」

多少、年食ってはいるが、その眼光は鋭く、まさに歴戦の猛者と
言った雰囲気がある男。

「いや、姫様。

どう見てもこの男、いやこのおっさんは失敗でしょう。
けっこう間抜けな顔をしていますよ」

「なっ！？ 何を言うか馬鹿！

この男は私がこれまで召喚してきたどの平民よりもすぐれた魔力を内包している。

それが分かんないの！？

これほどの人物なら必ずや魔王を倒してくれるに違いない！
きつと魔王退治もしてくれるに違いない！」

四度目の正直という感じで召喚したのが、渋いダンディーな男とはいえ、勇者っぽくはないので少し焦ったユティ。

「ワシは魔王に困っている世界を救いに来た異世界の勇者じゃ」

「ほら見なさい

やはり私の召喚は成功したのよ！

この人は本物の勇者なのよ」

テンション上げ上げのユティ。

「しかし姫様。

このおっさん、随分と年食っちゃってますよ。

「こんなんで剣が触れるんでしょうか？」

姫の付添の男の心配ももつともなもの。

すでにお分かりだと思いがこの勇者はキルカツツ・ウィルムヘツド。

御年50歳の初老と言っても過言ではない年であった。

キルカツツ自身が決めワイルドオヤジを目指しているのもあるが。

「ふむ、じゃあ若ければいいのかわ？」

呪文詠唱：代償なく覚醒する能力『メトラ・プレイス・ロック・ティー』

呪文詠唱によってあらゆる神、精霊、それに邪神や悪魔すらも無条件で味方につけるキルカツツの能力によりその肉体は30年ほど若返った。

「これでどうじゃ？ 異世界のお姫様。

ワシは正真正銘の異世界の勇者じゃろ？」

ちなみに言葉遣いはそのまま。

別に若返ってもキルカツツは別段可愛らしい『男の娘』という訳

ではないのだが……。

「カ……カッコいい！」

異世界の勇者様、是非とも私の世界の魔王を退治してください！
「！」

「うむ、引き受けたぞなもし！」

こうして、このフニヤララ王国が抱えていた魔王と名乗る痛い人物は異世界の勇者キルカツツの手により滅び去り、世界は平和な時を迎えるのであった……

だが物語はここからがようやくスタート。

もうちっとだけ続きますよ。

第2話：ラブ突然（後書き）

もっとギャグを、もっともっとギャグを……。

8 作目が「熱さ」をテーマにしてみましたからここらで「ギャグ」をメインに据えなければ私は私らしさを失ってしまいかねませんか
らね。

しかし更新ペースはどうなることやら。

第3話：キルカツツ・ウィルムヘッドのドキドキ大冒険（前書き）

恋人のユティが大好きなキルカツツの極普通の日常を淡々と描いた物語です。

過度な期待をせずにキルカツツにとっての「極普通」がどんなものなのかを見ていってください

今回の作品は3話まで含めてプロローグみたいなものですので投稿初日で3話更新にしました。

第3話・キルカツツ・ウィルムヘッドのドキドキ大冒険

「なあユティ」

「なんですかキルカツツ様」

「アバンチュールって熱くね？」

キルカツツの突然の一言。

だがその突然のセリフも、その言葉を向けた相手であるユティには当然の流れであり、突然に感じなかったので突然の一言というのもおかしいかもしれないが、この場にはユティ以外の人間もあり、その人間からしたら突然の一言なのでやはりキルカツツのセリフは突然の一言と表現するのが正しいのだろう。

「いやさ、ワシがこの世界に召喚、もとい自分から世界渡りできてきてからすでに半月経つしさ、そろそろワシらも次の段階に進むべきだと思うんじゃないよ」

キルカツツがこの世界に召喚されて魔王を名乗る痛い人物をぶつとばして半月。

その間ずっと食っちゃ寝を繰り返し、恋人らしくイチャイチャとしていたキルカツツとユティ。

そんな二人だが意外とそういうところはピュアなために、まだ手を握った程度の関係だったりする。

そしてキルカツツが行き着いた次の段階というのがアバンチュールというだったのだ。

「アバンチュール……、いいですねキルカツツ様。

私はあなたのその突拍子もないところが大好きですわ。」

「いやいや、姫様！

キルカツツ殿の発言に対しての感想がそれだけですか!？」

ユティは恋人であり自分の最も愛しい存在であるキルカツツのためならどんな場所にも付いていくし、どんな時でも一緒に居たいと思っっているが、それはこのフィヤラ王国にて長い間ユティを王女として教育してきた男には理解しがたいものだった。

「キルカツツ殿。姫様をどうするつもりですか!？」

アバンチュールだなんて、もしかして危険な場所に姫様を連れて行くんじゃないでしょうね?」

「何を言っておる。」

ワシが側にいる状況でワシらに『危険』というものを感じさせる
ことが出来る存在など自然災害を含めたとてあり得んじやろうが」

実に自然な動きで自分で淹れた紅茶を美味しそうにするキルカ
ツツ。
アッサムのミルクチー

砂糖もミルクもたっぷり。彼は甘党だ。

「簡単に言つとじゃな、『ワシ、ユティ、大好き、異世界、旅行』
の流れじゃ」

「さすがはキルカツツ様！」

私はあなたのそういうところが大好きなんですわああくん」

「えええええー!?!」

キルカツツの首に腕を絡ませ互いの頬をすりつけ合う二人。

どこから突っ込んでいいのかわからないこの状況にツツコミを入
れたのは、やはりユティの御側仕えである男だった(ちなみに名前
を出すつもりはない)。

「異世界って危険なんじゃないんですか!?!」

姫様みたいな世間知らずが言つても襲われますよ!

食べられちゃいますよー！」

「いい加減ユティ離れをしたらどうじゃ傍仕えのおっさん。

もし危険な目に会っても、そこはほれ、ワシの神様級の魔法でちよちよいのちよいじゃ。

というかこの説明を何度も繰り返させて文字数を増やそうという魂胆はいかんぞ」

「チツ！」

文字数云々と言うよりは、すでに心の中では話しの流れ的にキルカツとユティが異世界へアバンチュールの旅に出ることは決定事項だと考えているので、その間に自分の出番を増やそうと考えただけであったりする。

「まあ、そういう訳じゃ。

障害は愛を深める！」

すなわち障害が多いからこそ愛であり、愛＝危険なのじゃ！」

「その通り、血で血を洗う血みどろドロドロのバトルの末の熱い抱擁、そして心の内を愛しい殿方のみで満たす甘い口付け……最高のシナリオだわ！」

いつのまにやらアバンチュール旅行のシナリオを執筆しはじめて

いたユティ。

秒速1万文字書き上げるその筆速によるシナリオは、すでに厚さ10センチを超える超大作となっていた。

「ふふふふ、ここで私たちが一旦ピンチになって……、キルカッツ様が覚醒して敵を討つ。

その後全身を血に染めながら最後の別れとしてキスをせがむ私……だがすでにその時には事切れてしまった私に涙を流しながらも濃厚なキスをするキルカッツ様。

……と見せかけて実は私の体に付いた血は、相手を殺戮した時の返り血であって怪我ひとつなく夕日をバツクに『これからもずっと一緒だよ』なんて囁かれてみちゃったりして　しちゃったりして
「

「私は姫様の幼い頃から教育係もしてきましたが、どこかで間違ってしまったのでしょうか……」

「心配するな、恋愛感情というものは人の心を曇らせる。

だがワシらのこの熱い心は恋ではなく愛である！

お互いを助け合い、幸せしかないハッピーエンドになる予定じゃ「

愛は天使的、恋は悪魔的などと言うが、相手に自分を押し付けるだけの恋ではなく、相手のことを第一に考えるユティの気持ちは紛れもない愛であろう。

ただまあ、その相手であるキルカツも盲目的にユティのことを愛しているので、たとえ二人の感情が愛であったとしてもお互いの幸せが周りにとっても幸せかどうかは分からないが。

「そうですか……、すでに私は胃潰瘍が進行していますからね。行くならさっさと行ってください」

傍仕えの男の、この言葉を待っていたと言わんばかりに呪文詠唱を唱えるキルカツ。

「えーと異世界へ行く呪文ってどんなじゃったかの？」

「それなら私が詠唱しますキルカツ様。

アバンチュールを体験できる世界への異世界転移の呪文ですね」

神様から愛されまくっているキルカツは魔法の詠唱をする必要もないのだが、呪文は毎回何かしら唱えるという、こだわりを持っていた。

だが今回はユティが詠唱するというのでその呪文がどんなものになるのか面白半分、ユティ愛半分で見守っていたのだが……。

「私とキルカツ様の愛がもっとも育まれるパーフェクトかつ危険いっぱい夢いっぱい、血みどろドロドロ愛憎劇が繰り広げられて人

が人を信じられず、それでいて愛し合い、殺戮本能に溢れた人たちが平和で暮らす活火山しかなくて毎日火山が噴火して海は三日に一度酸の海になり紅い月が出るような気持ち悪さに溢れた世界を『造れ』

異世界への転移だと思っていたキルカツツの意表を突いたのは何よりもその『造れ』の部分だった。

何を造るのか？

どんな世界になるのか？

そんな考えがよぎったが、キルカツツは考えることをやめた。

すなわち流れに身を任し、成り行きを楽しもうというだけの思いからである。

第3話：キルカツツ・ウィルムヘッ드의ドキドキ大冒険（後書き）

そして当然の流れながらこの作品も段々と三人称から一人称の作品になりますのでここまでが三人称の話。

一人称のキルカツツ視点の話になるともう少しだけ暴走出来ると思います。

流石にこの程度の勢いでは「突拍子もないw」とか「馬鹿すぎるw」みたいなツッコミは来ないでしょうしね

私の戦闘力はフロム指数180万です。

第4話：作者は天狗が嫌いなのか？ いえいえ大好きですよ。（前書き）

漫画『うしおととら』の河童は一度しか出さない使い捨てのキャラかと思いきや最終話付近で再登場していましたし、私は河童好きでもありますね。

あまり関係ありませんが。

第4話：作者は天狗が嫌いなのか？ いえいえ大好きですよ。

シヨワワワ〜ン

魔法勇者ならぬ魔法王様キルカツツ&その恋人ユティの二人の物語の始まり始まり

って言ってもこの物語は基本的に一人称だから上での文もこのワシ、主人公キルカツツ・ウィルムヘッドのセリフなんじゃがな。

流石はキルカツツ様、前話まで三人称だった小説の地の文を、突如として一人称に変えてしまっただなんて小説の常識を悉く塗り替える御方ですわ

「いやいや、一人称だと分かつちよるならユティはワシの活躍を静かに見といてくれんかの？」

一人称小説の地の文で、視点変更なしな上に、キャラ二人がセリフを入れるだなんて読む人がこんがらがっちゃうわい」

「ふふ、確かに作者の信念はひたすらに笑えるギャグだけでなく、読みやすさの追及もあるのかもしれないけど、笑いにも色々な種類があるものですよ。

シニール、ジョーク、ギャグ、カオス、アメリカン、何を使っても面白ければいい。

そうなると面白ければ小説という枠にとらわれるのは良くないと思うのですわ」

「まあ、そつじゃのつ。

確かにワシの愛しのユティの言つとおりじゃ。

それとここまでの会話は全て前書きなので良しとしよう！
では本編へゴー！」

「はっはー！ 驚異の大魔法使いキルカツツ・ウィルムヘッド&その最愛の恋人ユティ・パミュロ、世界渡りに成功の巻」

「ひゃっはー！ 絶世の美剣士ユティ・パミュロ&その最愛の恋人キルカツツ・ウィルムヘッド参上よ」

互いに抱きあうようにして世界を渡ったキルカツツとユティ。

景色を見渡せばどこかの草原地帯のようだが何も見当たらない。

少し離れた場所に森があるようだが、その奥にでも行けば集落があるのかもしれないが、少なくとも二人が現れた場所には何もなかった。

はてさて、二人が最初に訪れた世界はどんな世界なのだろうか？

ちなみに、ユティが剣士という設定は今思いついて追加されただけで、伏線も何も張っていなかったなので何も疑問に思う必要はない。

ちなみにちなみに、先ほど一人称でやると言っておきながら、いまだに三人称なのは何となくである。

三人称も作者は好きなので、もうしばらくこのまま楽しむのも悪くないと思っているのだ。

「ややっ！ なあユティ、あっちに誰か人の気配があるぞい」

「第一異世界人発見ってところね。

早速私たちの愛を見せつけなくっちゃ」

森の奥……ではなく、そのさらにその奥の奥だろうか。

潮の香りがするところからしてこの近くに海があるのだろうか、その近くに村でもあるのだろうか。

「異世界での適当魔法その1：乗り物出てこーいの術」

「キルカツツがそう言つと草原には突如として真っ赤なスポーツカーが！」

しかし、キルカツツがただ車を出すだなんてつまらないことをす

るわけがない。

この車は異世界トリップのチート主人公がよく使う空間魔法から取り出したり、無から有を生み出す創造能力でもなく、その辺の草や木を魔法で変化させたものである。

この辺のしょうもないところで他作品との差別化を図る辺りが作者の変な癖とでも言うのだろうか気がしてはいけない。
これも今更のことなのだから。

「流石はキルカツ様！

スポーツカーに見せかけていますが、この車の原動力は術者の脚力のみなんですな」

「H A H A H A その通りだよ愛しのユティ」。

ワシの魔法によって身体能力無限アップ+時間や距離をいじる魔法によってガソリンみたいな時代遅れなもので走る車なんて、目じやない速度が出せるのじゃ！」

そう、ただ車を出しただけではない。

この車は見た目こそ普通のスポーツカーのようでないながら人力車なのだ。

キルカツは魔法により身体能力を強化しており、疲れることなく超人的スピードが出せるので、ガソリンやバイオ燃料などの古臭いものに頼らないのも当然である。

「車の運転の描写はオールカット

そして到着じゃ！」

車の運転だなんて面倒な過程は、はしよるのが魔法使いの常識！
人の気配を追ってきたものの、どうやらこの村？ を襲っている
のは……ありや天狗かの？」

「ここに来る途中に、異世界ファンタジーでは定番のドラゴンを轢
き殺したりしたのも『面倒な過程』に含めてしまっただなんて流石は
キルカッツ様

それに着いた先の村にいるのは間違いなく天狗でしょう。

赤くて長い鼻、それに翼を持っているだなんて天狗以外にはいま
せんわ！

でも、この世界では妖怪変化の類が普通にいるのでしょうかね？」

着いた村では村人らしき人たちが天狗に襲われているようだった。

「ぐっがつが。食い物よこせてん。

俺達『天狗っぽい族』に狙われたからには、命か食い物のどちら
かを差し出すのだけだてん」

どうやら天狗っぽい連中は種族が「天狗っぽい族」らしい。
本物の天狗とは違うのだろうか？

「そこまで、しんさい天狗っぽい連中よ」

「何者だてん!?!」

敵は武装した天狗っぽい有翼の集団。

見たところ達人級マスタークラスの強さを持つ者もいるし空からの攻撃は戦闘では厄介だろう。

だが、我らが主人公&ヒロインのキルカツツ&ユティの二人はそんな連中相手に怯むほど弱くはない!

「義を見てせざるは勇無きなり。
ただしエロスはある! みたいなノリでいかにもな悪人のお前たちを倒させてもらおうわい」

「キルカツツ様の言う『エロス』というのは主に私との甘い生活を指すものであって、貴方達とは関係ありませんので私の恋人をとるようなら殺しますので。
ええ、十全に殺してあげますとも」

気分は正義のヒーロー。
誰もが憧れる英雄の力を実際に持っている二人は常にノリで行動することを心掛けている。

この状況で助けに入らないという選択肢は最初からなかったのだ。

なぜなら面白そうだから!!

「ふっふっふ。俺達天狗っぽい族に齒向かうならば「ちょいさー!」
ぐわばあ〜」

敵が喋ってる最中に殴り飛ばす。
これは勇者の基本である。

「正義は勝つ!
ユテイも一緒に暴れんしゃい」

「任せてミスウィ〜トダーリン
愛のラブラブアタック!」

けっこうな数がいた天狗っぽい族の連中だが、チート丸出しの二人に広域殲滅魔法と広域殲滅剣技を同時に食らったことで、まとめて空の彼方へと吹き飛んでいき星となった。

この物語はチートな主人公とヒロインがメインなのでバトル描写はあっさりします。

「これにて一件落着じゃ。
村人連中も安心せい、悪人は全員吹っ飛ばしたぜぞい」

「私とキルカツツ様の愛に感謝しながら食い物を寄こしなさい」

「そりゃ強盗じゃろ。」

さつきぶつ飛ばした連中と変わらんわい」

そこでキルカツツは初めて村人たちを見てみたのだが、なぜか村人たちは頭に食器を乗せている。

先ほど吹き飛ばした天狗っぽい連中が妖怪の天狗なのだとしたら、この村の連中は……。

「ありがとうございますました異世界の勇者様方。」

わしはこの『カツツパルゲル村』村長のピン・シリユウという者ですじゃ。

一応『賢河童族』の長もしております。

恩人でもあるお二人の来訪を歓迎しますので幾らでもごゆるりとしていってください」

ピンと名乗る初老の男は何故かキルカツツとユティが異世界人だと知っているようだ。

「はて？」

ユティ、ワシら特に自己紹介もしてないのに異世界人ってことが知られておるぞ」

「そういう物語なんでしよう。」

疑問に思っては負けだと思えますわ」

特に気にするでもないユティ。

確かに気にする必要もないのでキルカッツは流すことにした。

「それじゃよろしく頼む、ピンの爺さん。」

ワシはキルカッツ・ウィルムヘッド。世界一の大魔法使いにしてユティの恋人じゃ。

ゆるりとしていくぞなもし！」

「私はユティ・パミュロ。世界一の剣士にしてキルカッツ様の恋人よ」

何故か異世界に来ていきなりだが二人はとりあえずの住処を手に入れた。

はてさて、この二人の恋の行方はどうなることやら？

第4話：作者は天狗が嫌いなのか？ いえいえ大好きですよ。（後書き）

武器の「カッツバルゲル」はゲームではよく見る名前ですし、知っている人も多いと思いますが、この武器の名前を見て最初にカッツパをイメージしたのは私だけではないはず！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0008z/>

アバンチュールの名の下に

2011年12月2日00時52分発行